

学生の関心を惹くための授業実践とその検証Ⅱ

安部 義和

A Review of Some Attempts to Attract the Students' Interest to My Lectures II

Yoshikazu ABE

【要 旨】

「なぜ勉強しなければならないのか」わからないままに漠然と勉強している学生が想像以上に多い。「しなければならないことだから、やむを得ずやっている。」というような消極的態度が見え隠れする。特に免許や資格を取るための専門的教科に比べて教養を身に付けるための教科にその傾向が強い。学生たちに興味を持って積極的に授業に参加してもらうにはどのような工夫をすればよいかといつも考えさせられている。

今回は学生たちに考える機会を与えたいと授業の中に教育に関するさまざまな話題を取り入れ彼らの関心を惹こうとした様子を活動報告として紹介したものである。話題については私の40数年の教職生活の中から学生たちに伝えたいこと、話してみたいことなどを集めてみた。中には思いもかけず話が発展して本学の建学精神の一部にまで及んだこともあった。まだまだ不十分な活動報告ではあるが、授業の中身が少しでも主体性を持って学生の心に浸透するよう工夫を続けている様子をお知らせしたものである。

1. はじめに

平成20年度後期の教職の講義は土曜日に集中した。午前中に初教専攻科の教育行政論、食物栄養科の教育制度論、午後に同じく食物栄養科の教育相談論と3時限連続で組み込まれた。特に教育制度論と教育相談論は受講する学生が同メンバーであったので飽くことのないように何らかの工夫をすることが必要であった。そこで180分にわたる講義の時間のどこかで、30～40分程度を「安部先生のためになる話」と称してさまざまな「教育にまつわる話」を、学生の意見も聞きながら行うことにした。前の時間に話したことはA4・1枚程度にまとめて次の時

間に配布するようにもした。そして、試験では、「教育の話」の中からどれでもよいから1つでも2つでも3つでも選んで自分の意見や感想を述べる問題を1問入れることにしたのである。今回は「教育の話」の平成20年度後期1講座分をまとめてみた。

2. 教育の話

第1話 人間とは

教育相談論の講義を始めるにあたって、あらためて「人間とは何か」と考えてみた。人間は果たして強い動物なのだろうか、弱い動物なのだろうか。学生たちに聞いてみると、皆口を揃えるように、「弱い動物だ。」と意見が一致する。

「人間は考える葦である。」(パスカル)、葦であるから強いわけなどないのである。素手であれば熊や猪にいと簡単にやられてしまう。最近山に餌がなくなったのだろう、麓の民家に出没したり、春の山菜採りや、秋のきのこ狩りで熊に襲われるといった事件が続発している。しかし、人間は「考える」という作用をする動物であるから一筋縄ではいかない。罾を仕掛けて捕獲したり、銃で撃ち殺してしまう事だつてある。ならば人間は強いのか。学生たちはなぜ口を揃えて弱いというのか。それは近頃の学生の自信のなさに根ざしているとも思えなくもないが、考えるという人間固有の作用に起因しているということは確かである。「考える」から強い、「考える」から弱い。この二面性を併せ持っているのが人間である。「考える」という作用は必ず善の方向に作用するとはかぎらない。お金はあったほうがいいのだろうが、昨今の分県の大分県教育界をみると、あることを願うばかりに誘惑の悪魔の手にかかってしまった。考えることのできる人間は、余程注意を怠らないようにしないと、自分のためのシナリオを自分勝手につくって、自分のためにそれを実行して、墓穴を掘るのである。例えば点数のよかった模擬テストの結果ばかりを参考にして志望校を決め、入試に失敗したりするのである。日常においても、自分で都合のよい結果を予想したり、自分の思惑の方向に事を進めようと無意識のうちに考える。そしてこれを繰り返すのが常である。スムーズにいつている間はよいのであるが、つまずいてうまくいなくなったりすると、悩みや苦しみとしてそれを表現するようになるのである。お化けや幽霊にしても、自分で始末をつけようとしてもがくとますます嵌ってしまう人間の本性が創り出した観念の所産である。この夏アメリカのホラー映画を見ていて日本のお化けや幽霊との違いについて考えてしまった。日本のお化けや幽霊は出てくる原因を本人が作ってしまうのだがアメリカのホラー映画は無差別に襲撃してくる。こんなところにも日本文化の優しさと奥深さを感じたのである。創造の源として世のため人のために役立つ部分

から、そのような負の部分まで「考える」という作用は持ち合わせているのである。「考える」という能力を持ったが故に人間は虎よりもライオンよりも強くなった反面、悩みや苦しみといったものから解放されるために、一生懸命勉強して知識を注入し続けなければならなくなった。考えるという宿命を背負わされたのである。ときに意地悪をしたり、他人を攻撃したりして強がっている人がいるが、その人こそ自分が最も弱いと吠えているようなものだ。考えることの出来ない、知識不足の自分を必死で守る姿を表現しているにすぎない。人間は自分の罪から免れ、悩みや苦しみから放たれるために、世界のどの民族に限らずすべてが鎮魂の宗教を持つに至ったのである。人間は究極的に何かを支えにしなければ生きていけない生き物になったのである。

ルソーは「社会が人間を弱くした」として「自然に帰る」ことを切望したのである。

第2話 教育とは

いも虫を平気で食べる子どもたちがいる。日本人の感覚からすると食べるどころか、背筋を凍らせて嫌がるというのがごく普通の対応であろう。食習慣に係る文化的差違と言ってしまうならば簡単な話であるが、教育という立場からみると、気づいたり考えたりしなければならぬ大層意味のある話だということになる。そもそも文化なるものは自然環境に働きかけて、自然のままのものを加工し教化し発達させ、人間にとって価値あるもの、役立つものにする過程或いはその所産として、人間の精神が創り出したものであるから、食文化などといわれるものは、そのあたりの自然環境と切っても切れない深く結びついたものであるとしか考えようがない。日本人も米を作るという生活の営みから、集団に起因する独特の文化を創り上げてきた。「村八分」のように集団から隔離されることが最もきつく堪えたのである。狩猟・採集を基盤とした生活の下では、農業にとっては害虫であるいも虫も貴重なタンパク源となるのであって、嫌がって食べなければたちまち栄養不足に

陥ることもわかっている。子どもたちのいも虫を食べるという行動は、無意識のうちにとも簡単に喜びをもって為されるのである。もし私たちがこの行為を実際に行おうとする場合、長時間にわたる訓練と忍耐が必要であろう。中には最終的段階にまでいたっても出来ないという人もおそらく居るのではなかろうか。平気でも虫を食べるという行為は、無意識のうちに親から子に伝わっているのである。自然環境が食生活という日常を通して食文化（食習慣）というものをつくり上げてきているのである。

私たちは全員が子どもたちに文化を伝えるという義務をもっているのだが、教育する立場の者（親・教師）が教育の内容を自己の無意識の領域に入れて伝えることが最も善い方法だということになる。わかり易く言えば、伝えたいことは、伝えようとする者が身に付けなければ、伝わらないということになるのである。「挨拶をすることはよいことだ。」といくら教えても、本人がしなかったり、意識的に行ったのでは伝わるわけがない。むしろ、お互いの関係にヒビが入って教育者としての立場を失うことにもなりかねない。

逆に、伝えたくないことは、身につけなくても伝えないことができる。私事で恐縮であるが、私の子ども（現在は2児の母親であるが）は虫を怖がる。ある日、自動車の運転をしていて、車内に飛び込んだ虫に驚いて運転を誤りかけたことがある。たかが虫のせいで子どもを乗せたまま事故を起こすことなどあってはならぬのである。その子が虫を怖がるのは母親である私の家内が虫を怖がるからである。子どもの前でいつも蜘蛛や台所に出る虫に悲鳴を上げたりして必要以上の反応を示したからである。そのことは、先ほどから申し上げているように、何のためらいも無く子どもに伝わったのである。「虫を怖がる。」といったような悪癖は伝えないほうが善いのであるから、伝えない努力をしなければならぬ。伝えるためには、無意識の領域に入れるほどの自己改革をしなければならぬのであるが、伝えない努力というものは、単に怖がらなければよいのである。怖がらない

ように一生懸命振舞ってれば、本当は未だに怖くても、伝わらずにすむのである。人間は時としてあるがままの自分を伝えてはならないということになるのである。

私は、平成19年の1月に母親を亡くしたのであるが、あらためて「親の偉大さ」について考えさせられた。そして「親の偉大さとは、子どもの無意識の領域を支配していることである」との私なりの結論を得た。私の無意識の領域は、母親の胸に抱かれているときから、無意識の内に伝わってきたものに支配されているのである。63歳を過ぎた今でも無意識のうちの行動や反応が生活の大半を占めている。その行為が他人にどのような思いをさせたか、気遣いは出来ていたかなど気になるものであるが、大過を免れているのは、無意識を支配する親のおかげであることに気付くのである。無意識に虫を怖がるという事例は、意識的に子どもに伝えない努力をしさえすればすむことなのである。しかし、伝えなければならぬことは、自分の身に付けることなしには決して伝わることはない。そのような努力が代々出来ている家庭は「あの家の人はみんな穏やかで優しい」などの家風といったものを漂わせて、社会的評価を受けることになるのである。

第3話 人間はなぜ学ばねばならないのか

1. 知ることの大切さ(知らぬことの恐ろしさ)

イギリス人が大量の羊を連れてオーストラリアにやって来たころ、アボリジニーは未開の状態であった。彼らの経済的観念は原始共産制の段階にあり、森に実る果実や木の実も、野に住む動物も誰のものでもなく獲った人のものとなり、彼らはそれをかれらの方法で分配し、食した。J・ロックが彼の社会契約説の中で「泥棒は殺しても良い。」と言ったといわれることにも象徴されるようにイギリス人の財産保全の思想は極めて厳しいものがあった。「J・ロックの社会契約説は財産保全のために国家を必要としたといっても過言でないほどである。」と“西洋哲学史”でバートランド・ラッセルも述べている。アボリジニーにとっては、一日中追っ掛

け回してもとれるかどうか分からないカンガルーに比して、人に柔順な羊をとることなどいとも簡単なことであった。神に感謝し、極めて安易な方法で野に行く動物(羊)をとらえ食したのである。彼らは殺された。「なぜ？」—彼らは、イギリス人の所有という経済的観念を全く知らなかったが故に不本意のまま銃弾を受けるに至ったのである。彼らがイギリス人を知っていたら、イギリス人の所有の観念を知っていたらこのような悲劇は決して起こらなかったはずである。イギリス人もまたアボリジニーのことを余りに知らなさ過ぎたという点で同様である。「知らない」ということの恐ろしさを身をもって教えてくれた教訓である。

我々の日常生活の中で知らなかったが故に殺されるということはまずありえない。しかし、知らないが故に、教養がないが故に幸福感をあげられないことはしばしばある。ただ知らないから気付かないだけのことである。

2. 教室の雀(何のために学ぶのか)

教室に一只の雀が迷い込んだ。外に出ようとしてはガラス窓にぶつかる。何度もぶつかる。恐らく雀の認識の中にはガラスというものは存在しないのであろう。見えるところは必ず通過できると思込んでいるのだらう。知らないということは恐ろしいことだ。我々の日常をつぶさに見ると、たかが雀の事だと笑ってはいられない。これと同じことが我々の身近にも存在してはいないだろうか。存在はしていても知らないことだから我々自身そのことに気付かないでいる。雀と同じだ。我々には現在自己が身をおいている環境(考え方・思想)がある。人間は成長とともに新たなグレードの高い環境という部屋へと移動する。ガラスの存在を知らないと雀のようにいつまでも同じ部屋にとどまっていなければならない。そしてそのことを自分自身気付かない。

学ぶということは知ることであり、哀れな雀の姿の自分に気付くことである。知識を得、教養を高めると客観的に自己をみつめる眼が培われ、自己本来の姿を追い続けることも可能となる。大学の試験に合格することを究極の目的と

して学ぶことは間違っている。なぜなら、大学に合格したら学ぶことをやめてしまうかも知れないからだ。我々はどのような時も生きて行く場合ある段階の環境(考え方・思想)の中にある。だから今、自分のおかれている環境の中で最善を尽くし努力して、より多くの事を知り自己をよりよく変革していく、そのためにこそ学ばねばならない。それは新たな夢と希望に満ちたより程度の高い部屋への扉をみつける重要な課題であり、また再び学び続けなければならぬことを自覚させられることへと連鎖する。このような努力をなし得た若者を世の中は両手をあげて迎えてくれるのである。

3. 学ぶ態度(心構え)

人の世は外的結合の世界と内的結合の世界よりなる。外的結合とは利益(経済的)で結び付けられた関係を、内的結合とは心(精神的)で結び付けられた関係を示す。そして、このことは同時に作用されなければならぬ運命にある。

【外的結合=利益=豊かな物質生活(←技術)】

【内的結合=心=豊かな精神生活(←教養)】

私にとっては最初の赴任校であった日田林工高校で当時の生徒が言った。(実は同僚の建築科の教員が口にしていた事でもあるのだが)「建築の勉強は将来金になるが、地理を学んでも腹はふくれぬ」。確かに地理を学んでも先生か学者にでもならぬことには収入は殆ど約束されない。しかし、地理を学ぶことによって地域の偏見を取り除き世界のどの地域の人々とも理解の上に立っての話し合いが出来るようになるのである。例えばイラク人との会話で「水がなくてお困りでしょう。」と切り出したところ「いや水が多すぎて困るのですよ。」と予想外の返事に戸惑ったことがある。たまたまその人はイラクでもチグリス川とユーフラテス川の間の湿地に住んでいるということで軽率なことをしたものだと言いつつ反省している。これを人間関係に置き換えてみれば話はたやすい。教養が乏しければ偏見が大きな顔をして歩きだし、必要なものは与えず不必要なものを無理強いする事となり、友人はおろか身の回りの有益な人間関係をも失ってしまうことにもなりかねない。

近代に至るまで職人の仕事とされて来た技術が学問の対象とされることが一般化されるようになった現代、私たちは2種類の勉強をしなければならなくなった。資格と教養の2種類である。大学に入って高度な技術を修得し、物質的に豊かな生活を実現してみても空虚さがつきまとうのは、教養という人間関係の潤滑油がもたらす精神的な豊かさが伴わないためである。若い時代は人間形成で最も大切な時期であるから、技術や資格を身につけるための学習のみを重視して豊かな心を育てる学習を軽んずることがあってはならない。(前者が利益を求める外的社会を結実し、後者が心を求める内的社会を産み出すものである。人間の行為は常に同時に派生するこのバランスによってこそ成り立っているのである。)最も恐ろしいことは(先の生徒のように)軽薄な結論を出しそれを妄信して青春の貴重な時を無駄に過ごすことではないだろうか。

4. スポーツの意義(部活動と学習活動の両立)

スポーツと学習はなぜ両立させねばならぬのであろうか。人間は生まれながらにして相反する二つの性質もっている。ひとつは平和を願う心であり、もうひとつは闘争の心である。勉強し、学問を積み、教養を高めることは争い事を平和的に解決する資質を養うことになる。だから平和を求めるには世の各人が教養豊かな人格者になることが一番の近道だと思う。しかし、勉強することを争いととらえる考え方が存在するとしたらそれは誤っている。勉強することは学問を深め、教養を高め、真理を求めることであるから争うべき対象がない。(強いて言えば自己との争いである。)真理に近づくことによって同胞を自ら敬服させるべきものなのである。「話せばわかる。」という言葉は教養人の間でしか通用しない。勉強を争いの手段と理解した向きは様々な誤解と偏見を世にはびこらせている。世渡り術を覚えたり、人の虚をつく抜駆けや最後には人の不幸を願うことにもなりかねない。このような勉強を強制すると成績の思うようにならない子どもは敗北感をもつ。この負け犬意識が小学校、中学校、高校と長い年月

の間に蓄積されて、ある時期一気に爆発し思いもかけない大事件を引き起こす引金にもなりかねない。誤って勉強を闘争の手段としてとらえることが、このように大きな矛盾を引き起こすことになるのであれば、要するに若い青年の時代に血沸き、肉躍る情熱と闘争の時をもたず勉強という異質なものの中に歪んだ闘争を持ち込んであたかも正義のごとく振る舞うことの罪は極めて大きく、若者を惑わし自己を見失わせる結果を生むことは必然であろう。

スポーツ競技は真に争うことを目的にしている。定められたルールの下に勝利者を競うのである。若者が本来胸の中にもつ熱い争いの血潮を正しく反映させるのがスポーツである。連日勝利をめざして苦しい鍛練を重ねる。最後に勝利の栄冠をつかむのはたったひとつのチーム、ほんのわずかな人間のみである。多くの若者が必死の努力も空しく敗れ去る。敗北感、虚脱感が漂う。しかし、この敗北感は争うべくして争い果して敗れ去ったのであるから将来により大きな希望を生み出す源泉となりうる。これが争ってはならぬ争いに敗れて不当な敗北感を味わうのとは格段に違った爽快な気分をもたらすのである。日本の武道にみられるように、この闘争も長い年月のうちに哲学的意味をもち「闘わずして勝つ。」という段階にまで高めることも可能である。闘争でさえ最終的には争わないことを目的とするものであるにも増して、勉強することを闘争ととらえることの空虚さを知らぬ存在のいかに哀れなことか。我々はこの若さが合わせ持つ両刃の剣の間違う事なく振るうことによって健全な青春時代を過ごすことがバランスのとれた大人への正しい門出だと考えねばなるまい。

第4話 山の話

研究室の窓から高崎山がよく見える。子どもの頃から「高崎山が隠れると雨が降る。」などと言って見慣れた大分側からは、逆の方向になるのだが、山容は似かよっていて親しみ深い。ある時、これも子どもの頃の話であるが、母親の里である挾間町の方から見た時、ショックに

似た驚きを感じたことがある。「これがあの高崎山か、そんな事はない別の山だ。」と何の疑いも無しに思ったのである。しかし、事実は高崎山に違いなかったのである。

左様に山というものは見る方向によって姿を変えるものなのである。自分が動けば山は刻々とその姿を変容させる。しかし、山自身は少しも変わることなく存在し続けている。私たちは自分が動くことによって山の美しい姿もあまり気に入らない姿も見ることが出来るのである。ある位置からの姿が気に入らなければ、山の周囲を移動すればよい。いつかは美しい山の姿の見える位置に到達するのである。ただ移動する道のりはかなり厳しい。なぜなら、山頂から山麓にまで伸びる尾根や谷を横切らなければならないからである。しかし、必ずや目的の位置に達するというのを忘れてはならない。

自分を取り巻く環境についてはどうであろう。自分をわかってくれない父親が嫌いだ。余りのことに口出しをしすぎる母親なんて居ないほうがいい。口やかましい先生、規則ばかりの学校。自分を取り巻く環境は気に入らないことばかりだ。なんと不幸な環境の中に自分は置かれているのか、と思うことはよくあることだ。しかし考えてみると、父親も母親もその人しかない。よその人をお願いしても絶対に母親ではないし、父親でもない。決して代えられない不動のものである。そんなに気に入らなければ自分が動いたらどうか。動くことは尾根や谷を越えるように苦しくきついことであるが、すばらしい父親や母親の姿に遭遇する地点に辿り着く崇高な目的をもった道程である。自分が動かず周りを自分に合わせようとするのが矛盾と不幸を生み出すことになるのである。よく言われることであるが、書道は楷書から、絵画はデッサンから練習に練習を重ねて自分の世界(抽象の世界)を創造する。努力もせず未熟なうちに、自分の世界を早く創ろうと焦ったり、苦勞をいやがったりすれば、未熟な自分の考えに無理やり周囲をあわせようとしなければならなくなる。そして独善に浸った自分の世界が社会から遊離していることに自分自身気づかなく

なる。

変わらぬもの、動かぬものは何なのか、そこから出発して失われた自分を再発見しなければならない。「主体性の何たるや。」を未だ体得しえない発展途上の未熟者であるのなら、自惚れを捨てた謙虚な態度こそ肝要なのである。自分の置かれた環境の良し悪しは、自分自身の考え方一つによっている。努力なしには何も生まれない。動くことが美しい山の姿を見せてくれるように、努力することが夢や希望の灯をつける。夢や希望が活力を生み、「生きる力」の源となる。周囲が変わることを求める前に自分自身が変わらなければならない。

第5話 車椅子の子

私の高校に車椅子の生徒が入学してきた。筋肉の萎縮する難病に侵されているのだが、挨拶などもよくできるニコニコした女生徒であった。高等学校は自分の意志で入学するのであるから、義務教育の小・中学校と違ってその子のために一人の専任の先生をつけることはできないが、校内のどこにでも行けるように通路にスロープをつけたり、その子のためにエレベータをつけようとその場所をさがしたりしていた。お母さんは送り迎えと昼休みの用便の世話に毎日学校にやってきた。大変なご苦勞であるが親であるという意識がそれに耐えさせていたのだろう。しかし、お母さんも人間であるから病氣をすることもあるし、別の用件で来れないことがあることはわかっていたので、そのときは先生方がお母さんの代わりをしたのである。ある時、その子のお父さん、お母さん、お母さんの友達の慈善団体の女性、社会福祉事務所の方の4名が校長室を訪ねてきた。お母さんが言うには「保健室の養護の先生が、用便の世話をする際、ゴム手袋を使用した。」と言ってひどく怒っていた。確かに、用便の世話をする場合は直接拭うわけであるから、ゴム手袋を使うことは、わが子を汚いもの扱いをしたと受け取るのは仕方がないかもしれない。少なくとも訪ねてきた4人の方は皆その考え方であった。どんなに説明しても理解してもらえなかったので、教頭先

生に、素手でやってくれる先生を選んでお世話をするようにお願いした。しかし、とても残念だったのは、「私のこの手でも素手でお世話をしてもよいですか。」という質問に黙ってしまっただけで答えてもらえなかったことである。私は当時、恥ずかしい話であるが薬指に水虫を患っていたのである。人間は多くの場合先入観で浅薄な判断をしてしまう。汚れているのは自分の方だと、コンプレックスが己の公正な判断力を無視して決め付けているのである。おそらくその子も、いかに性格のよい子であっても、自分が汚いものとして扱われたと思って悲しんだに違いない。この子を悲しませたり、不幸だと思わせたりしてはいけない。素手であろうと、ゴム手袋をしていようと、あなたのお世話をしてくれる人は皆、あなたのためにと願っている人なのですよ、と教えてやればこの子は悲しんだり、不幸な気持ちに沈むことはないのではなかろうか。教育とはこのことをいうのである。この子の素直な感謝の気持ちが、車椅子を押してくれる友達や、お世話をする周りの人に伝われば、この子自身が幸せに包まれるのである。そして、お世話をする人たちも幸福感に包まれるのである。もしかして、お母さんがいうように汚いからとゴム手袋を使った人もいるかもしれない。しかし、この子の美しさがその人に伝わって、内面から手袋を脱がせるようになれば素晴らしいことだと思う。

第6話 気は易しくて力持ち（人を育てる感謝の心）

近頃思うことであるが、私たち日本人の原点とも言える「気は優しくて力持ち」ということばの意味が段々と薄れてきているように思えてならない。金太郎は力が強いが故に弱い人を助ける事ができるのである。それは現在で言えば勉強することによって裏付けられた知識や技術であり、たゆまぬ努力によって培われた技や体力である。そしてそれが優しさというものにくるまって表現され世のため他人のために役立つのである。ところが今の世を冷静に見てみると、他人に優しくしてもらおう事ばかりを願って

自分が強くなることなど忘れてしまっている人が多い。誤った平等意識が抜きん出たことを評価しない風潮を蔓延させたりもした。優しくしてもらおう方は当たり前と考え、優しくする方はそのような力も余裕も持ち合わせていない。これが現代社会の矛盾の一つである。皆さんにお願いする。「力持ち」になってほしい。昨今の世の中は、「改革」の2文字が充満する厳しい競争社会である。その中に障害物を乗り越えるより、取り除くことを教えられた君たち（「15の春を泣かすな」と高校入試をなくそうとしたこと等）が飛び込むのである。私の心配はそこにある。「負けるな」「負けることに負けるな」、人生は挑戦であり、失敗は付き物である。苦勞を重ねて、努力を怠らず、失敗を克服して強い人間になってほしい。そして本当に弱い人を助けて欲しい。私たちの世の中も段々と正しい平等観（機会の平等と結果の平等の相違など）を身に付けて君たちの努力を後押しするつもりである。万一、一時的にでも他人に優しくしてもらわなければならない立場にたつことになった時は他人の優しさを当たり前だと思ってはならない。感謝の気持ちで受け容れれば、お世話をしてくれた人に感動と勇気とを与え、その人をより大きな「力持ち」に育てる力となる。この世は皆支え合って生きている。強い人は弱い人のためにより強く成らねばならないし、弱い人は強い人の心の支えと成っていることを忘れてはならない。皆さんの夢と情熱で「気は優しくて力持ち」をこの世に溢れさせてほしいと願っている。

第7話 どん焼きとせんべい（受容とは）

もうしばらく前の話になるが、私の職場では月にながしかのお金を出し合って、毎日3時におやつを配っていた。「どん焼きとせんべい、どちらがよいですか。」「どん焼きがよいに決まってる。」「どん焼きは数が少ないんですよ。」私にはその会話がよく聞こえているのだが、私の机上にはどん焼きに比べれば貧相なせんべいがだまって置かれていた。配った本人もどん焼きを頬張っている。このことをどう理解し、ど

う受容するか。生徒指導論的にいうと極めて明確なテーマをいただいたわけである。生徒指導で大切なことは生徒が発するシグナルを見落とさないことである、とよく言われる。では、そのシグナルとは何か。長年教育に携わっていると、信じて、信じて、そのあげく裏切られた経験など数知れない。しかし、だからといって止まるわけにはいかないのである。この場合、なぜ黙ってせんべいを置いたのか考えてみる。「数が少ないので、この人にはあげなくてよいだろう。」と軽くみられたととるか、少し無理が在るかもしれないが「年寄りにはどら焼きは胃に重い。」と大切に扱われたのか、自分の今からやろうとする行為に気まずさを感じ言う勇気がなかったのか、好き嫌いを聞くほどの親しみをもっていなかったのか、はたまた全く関心がなかったのかなどこじつけでもよいからより多くの選択肢を考えてみる。多ければ多いほどよい。そして、ここで結論を出す必要はない。無駄なようであるがこれが大切な作業なのである。そして、このことを繰り返すことによって理解へと進み、受容の態勢も当初は信じられなかったくらい整うかもしれない。自分の中に「どら焼きが食べたい。」などの欲や「あの人は嫌いだ。」などといった先入観があるとすぐに結論が出てしまう。欲や先入観はいやおうがなしに決め付ける類のものであるので、ここでは無欲でシグナルを受け止め、理解・受容へと発展させなければならない。受け止め方には作用して反応を見るやり方と、作用することなく一方的に受け取ることによってその継続を見るやり方とがある。時によっては前者が必要な場合もあるが、多くの場合後者の方法をとるべきである。これが人間観察の基本的な方法であり、シグナルに純粹さを失わせない方法である。シグナルは無意識のうちに発するものでなければ意味がないからである。皆さんのレポートの中に、人を受け容れるためには、お互い話し合い理解しあった上で受け容れる、という意見がかなり多くあったが、それは一般的な方法で、理解しあえなければ受け容れなくてもよいといった逃げ道がある場合である。プロにはそ

んな逃げ道はない。自分のクラスの生徒であればどんな生徒でも理解し、受容しなければならない。うまくいくこともあれば悩んでしまう事もある。しかし、一番の悩み・苦しみは結論を出そうとするとときに表れる。だから、先ほど述べたように作業を繰り返しながら結論が訪れるのを待てばよいのである。結果は得られないかもしれないが、状況に変化がでたり、一歩でも前へ進むことができるかも知れない。このとき、ある意味の喜びや悲しみは感じられるものだ。その積み重ねが大切で、ある日突然（卒業の日とか）とてつもない感動に見舞われるかもしれない。教育とは数字で計れる科学ではない、誰にも正体を見せない深遠な哲学なのである。

第8話 現代人の病

現代人を蝕んでいる病とは一体何なのだろうかと考えてみると、自己中心的な考え方に陥って尚かつそのことに気付かないという病状があちこちに蔓延しているような気がする。学校においては、不登校といじめが近年における最大の関心事であるが、いずれもこの病との関連が深い。不登校は自己主張の無意識化が原因の大半を占めているように思われてならない。自己主張の無意識化とは、自分の主張を通そうとすれば必ず我慢をしなければならない人が出てくることに気付かないことである。家庭にテレビが1台しかなかった時代には、必ずといっていいほどチャンネル争いが起こった。それを解決するために各々の家庭にテレビを見るためのルールができてくる。そうすれば自分の好きな番組を見ているときは家族や周囲の人たちが自分のために我慢をしてくれているということを否応なしに自覚するはずである。しかし現在のように各部屋にテレビが設置されるようになると、いつでも見たい番組を誰に遠慮もなく見ることができる。番組の選択はある種の自己主張であるが、そのために我慢する人など存在しないとすれば、自己主張が無意識のうちになされることは当たり前のこととなる。学校に来るとクラスにはそのような生徒が40人、全体ではお

よそ1,000人いるわけである。自己主張を通すことは容易なことではない。自己主張を通した生徒も、そのために我慢をしている生徒の存在や彼らの心情を汲み取ることができず、また自己主張の通らなかった生徒はなぜ自分の思い通りにならないのか理解できないばかりかそのことに対応すらできなくて取り乱してしまう。そして自分の思いの通らない環境から無意識のうちに逃避しようとするのが不登校の原因の一つになっている。いじめについても、昔はなかったかという決してそんなことはない。にもかかわらず今ほど言われなかったのは情報が少なかったということもあるが、一番の原因は集団からものの考え方が発していたからかも知れない。連帯責任として罰せられる時は、とんだ迷惑を被る者もあるにはあるが、間違いなく複数で罰せられる。仲間同士の責任は仲間とらねばならなかったのである。しかし今は一人一人を大切にするという意味で個別化が進んでいるため、仲間同士の責任も個々の責任として追及されるようになった。「自分の子どもは自分が守らなければ」と周囲を敵に回して必死に攻撃している親の姿は、ますますその子を孤立させ修復の出来ない人間関係の壁の中に閉じこめてしまう。守るなら複数の子どもを守ることで仲間をつけてやらねばいけないし、何より大切なのは攻撃をすればするほど周囲との溝をますます深めるということに気付くことである。「子どもの喧嘩に親が出た。」と昔から言われているように最後の最後まで子どもたちを信じて、子どもの世界に踏み込まず、子ども同士で解決させるような我慢が必要である。金銭を脅し取られたり、暴行を受けたりするようないじめは警察の力を入れてでも早急に解決しなければならぬことは言うまでもない。

自己中心病の症状は、周囲に自分を合わせようとはせずに、自分に周囲が合わせてくれることを一方的に求めるわけで、思うようにならないと辺り構わず非難攻撃し、それが自分自身の不平不満となってストレスと化し、自分を追い込み、世の中を暗くする。

様々な苦難を乗り越え、地動説が天動説に変

わって日の目を見たとき、それまで多くの研究者を悩まし続けた科学の難問が、天井がとれたように解決の道を歩み始めた。私たちの生活も自分が動く、自分が変わることによって大らかで明るく楽しい生活へと変わっていくのではなからうか。そのためにはまず自己中を改め「世のため、人のため」を実践することである。「情けは人のためならず」である。

第9話 受験勉強の弊害

「きちっとした基準がないと生徒に指導が出来ません。」これは、保健室登校を認めるための内規を審議している際の、40歳半ばのある女性教師のいかにも自信ありげな意見である。この基準とは保健室にのみ登校が出来るが教室には入ることの出来ない生徒を出席扱いにするか否かの時に発せられた言葉である。朝のホームルームでもよいし、欠課規定にある授業の半分以上の時間を教室に居れば出席として扱うが、教室に入れない保健室のみの登校では出席とは認められないという線引きをしようというのである。

たしかに基準がないと指導がしにくいことは事実であろう。しかし、この考え方の中に受験勉強的発想から抜け出ていない姿を見たような気がする。なぜなら、受験勉強は曖昧さを排除しなければ解り難いという欠陥を持っているからだ。自分の専門分野である地理の立場から考えてみると、熱帯雨林地帯とサバンナ地帯とを区別するのに一本の線で明確に分けると生徒からは「よく解る。」と評価されるであろうが、実際は密林から徐々に疎林となりやがて草原となるのが本当の姿であり、その漸移地帯を「どちらともいえない。」と表現すると「曖昧で解り難い。」と言われる。受験生たちは声をそろえて前者を教え方の良い先生、後者を教え方の悪い先生だと言うだろう。しかし学問として大切なことはどうして木が減り、草原へと変わっていくのかということの解明するためのこの曖昧な漸移地帯の存在なのである。真実を求めるにはこの追求を放棄してはならないのである。確かに読み書きそろばん的なものは線を引

いて叱咤激励しながら身に付けさせるべきであろう。しかし、精神に深く根ざした諸問題はひとつひとつその真相を突き詰めつつ結論づけていかねばならない。線をひくべきものと、ひいてはいけないものとのをしっかり区別する能力を身に付けることが大切なのである。

現実の世界には多かれ少なかれ必ずこの曖昧な部分が実在する。パークリー（アイルランド人の哲学者でガリバー旅行記を書いたスウィフトの友人）は「この湯は熱いか、ぬるいか。」との問いに対して、科学的に 100°C 以上は熱く、 100°C 以下はぬるいといったような客観的な事実（解答）は存在しないと。なぜなら、冷水につけた左手では熱く、湯につけた右手ではぬるく感じられるからだ、という。受験勉強的価値観が熱く感じさせるのか、ぬるく感じさせるのかは別にして、この答は未だ無意識の世界で息づいているのではなかろうか。これくらいの強い基準がないと指導が困難になっている社会環境が背景にあること自体が情けないことではある。私たちは、もっともっと勉強して受験勉強的発想から抜け出し、客観性と主観性とのバランスを冷静にとれるような自己啓発をしなければならない。客観性（科学性）は冷たく、主観性（心性）は熱くなりやすいものだ。今までが余りに冷たすぎた、そのことが教育改革を求める声の一因となっていることを忘れてはならない。

第10話 まっぴらごめん

人と話していて思いついた。理屈や主張は理解できるのだが、話し相手に夢や希望を持たせない人がいる。一生懸命会話することは、その人の意見を聞きながら自分にないものを得、会話の前よりも前進した自分を確認することが大切だし、自分自身もそれを望んでいる。そして成長した自己をその人に感謝するものだ。言っていることは解らぬではない、意見のずれもそれほどでない。とすれば、意見の一致に力を得、又互いに得るものを確認合って心地よい気分になるはずである。時には全く意見が違っていても、ほんの少しの同意の部分を手がかり

に、自分に受け容れられる部分を確認して両者が共鳴し、出会いの価値を高めることに感動することだってよくあることだ。人間の最大の勉強は他人の話聞くことである。これは言うまでもなく自分にとっては未知の領域である他人の経験を自己の概念として取り込む事ができるからに他ならない。出会いはそして会話はお互いを発展させてこそ価値あるものとなる。残念な出会いの結果（原因）は自己主張をする際の性癖ではないかと思ったりもする。本質論でなく方法論にこだわる人。それほどの違いはないのに他人の意見を否定して自分の意見を理解させようとする人（自分を優位にしたいため）。自分の枠から出られずに、発展的思考の出来ない人。自分の理解を超えた段階で他人の意見を拒否する人（自分の勉強不足を認めたくない）。自分の主義主張と異なる領域になると思考回路の止まる人（狭小な教条主義）。このような人たちとの出会いは悲しいけれど学ぶものも少なくお互いに向上することもなく、むなしさだけが残って不快な気分になる。一方、度量の大きい人は異なる意見も一旦は胸の中に入れて、自分の意見と共に咀嚼して表現し、知らず知らずのうちに感銘を与えるものなのである。度量の大きい人間は敵をも味方にしてしまう。反面、度量の小さい人間は同士をも失う哀れな結末を迎える事となるのである。アレクサンダー大王とアリストテレスの天才同士の出会いは何も実りがなかった（アレクサンダーがアリストテレスの冷静さを身につけていたら、あの大遠征は成し遂げられなかったのではないか、またアリストテレスがアレクサンダーの情熱に影響されていればあの冷静な哲学体系は生まれなかったのではないか。）といわれるが、希有な天才とは違って私たち一般的な人間同士すなわち凡人の出会いは何かを生み出してしかるべきである。少なくともそれくらいの豊かさや余裕を心に持って生きていきたいものだ。貧相な人生を自ら望むような生き方はまっぴらごめんである。

第11話 川の話

私は竹田高校で2年間、大分鶴崎高校で3年間校長として勤務した。面白いことに竹田高校は大野川の源流に近い稲葉川の川沿いであり、鶴崎高校は大野川の最下流、乙津川との間の三角州上にあった。

竹田の町は、山々に囲まれて、入りくんだ谷が多く、トンネルばかりであり、学校の上空を見上げて空が狭いという表現がぴったりである。だから紅葉の頃はすばらしい。大分に家があった私は、豊肥線でほとんど毎週金曜日に大野川沿いを下り、日曜日の夜上ることを繰り返した。車窓の景色は上流から下流へ、下流から上流へめまぐるしく変化する。

川は上流で激しく岩を砕き谷を刻む、深く刻んだ谷は周りの谷を支流として従え、本流としての地位を確固たるものとする。川の流れは自然のうちに大いなる闘争を延々と繰り返しているのである。若き日や事業等の草創期は動機付けの時だから、岩をも砕く闘争心や挑戦的な態度が大切である。その点、河川で言えばまさに上流に当たる。下刻作用の如く精進し、妥協を許さず、己の目標に向かって邁進しなければならない。そのため体力や思考力などのエネルギーも十分に持ち合わせている。ここで力を抜いたのでは、たちまち他人の支流となって主導権を握られてしまうのである。山間地の閉鎖性はわき目もふらず下を向いて、谷を下へ下へと刻んでいく一途な行動の表現なのかも知れない。上流は人生の基礎をつくり上げるための若き日の必死に精進している姿を映し出している。

下流では川幅を広げてゆったりと流れる。上流で砕いた岩を小さな土や砂にして大地を作り、実りをもたらす。年齢を重ねた円熟期は収束の時だから、理性的に振舞うことが求められる。一生かけて手に入れたさまざまな知識や技術を多数の人に教え施さねばならない。海辺の開放性は事を成しえた落ち着いた表現なのかもしれない。上流は挑戦的な若き日の姿であり、下流は熟年の寛容さを表して、人の一生や事の顛末を見ているような想いを抱かせる。川の流

れは自然だからこの転換が見事に行われるのだが、人間の場合はどうも素直にはいかないような気がする。いま自分が携わっていることについて、全体を眺めた上で現在の地点を見極め、上流部にあれば益々追及の手を緩めず、下流部にさしかかっているのなら許容という寛大さを示すべきである。ここでは感情をコントロールして情報を集め整理選別し、この判断を的確におこなうことが大切なのである。そのためにこそ勉強しなければならない。世間もバブル期の荒々しさから、共生のおおらかさへと転換しようとしているのに、私たちの心はそれについて行けない悲しさを背負わされているようだ。時の流れも川の流れも共に留まることは無い。的確な地点を見逃すと、二度と手に入れることは出来ないのである。下流で谷を刻むことは出来ないことであるし、してはいけないのである。そのためにも「学ぶ心」を大切に作る姿勢は首尾一貫して変わることがあってはならない。

第12話 進路選択にあたって

進路選択にあたって大切なこと、それは目標に向かって「自分を合わせる」のか、それとも目標を「自分に合わせる」のか、との選択であると思う。昔は目標に向かって必死に「自分を合わせる」努力をしたものであるが、最近では「自分に合わせる」選択をしなければ後悔するとか、長続きしないのではないかと言われたりしている。現在の進路選択の様子を端から見ていると、「自分を合わせる」ための努力が薄れてきて「自分に合わせる」という妥協的な態度が見え隠れする。まだまだ、将来についての決定的な価値観が確立されていないうちに「自分に合わせる」ことをあまりに重視した進路選択をすると、判断基準に好き嫌いといったような刹那的な感性が入ってきて、その結果として安易に進路変更したりすれば、こちらの選択のほうが余程後悔に繋がったり長続きしないのではないかと心配している。一方「自分を合わせる」ことを重んじた進路選択は、自分を変えてでもこの方向に進みたいという意志に支えられて最高の努力をするわけであるから苦勞も障害も多

い。それらを乗り越えて目標を達成するためにはそれ相応の気力と根性も必要だ。

では、どちらの選択がよいのであろうか。その時の自分を冷静に観察してみよう。「自分に合わせる」選択の場合、一生懸命努力した結果の自分に合わせているのか、それとも甘えた自分に合わせようとしているのかが問題であろうし、「自分を合わせる」選択の場合、挫折と言ったような残念な結果にならぬよう、何が何でもやり抜くのだといったような強固な意志を持ち合わせているかが問題であろう。ありふれてはいるがこれが進路選択の極意ではなかろうか。努力以外に道はないのである。

3. おわりに

講義の中での「教育の話」は私の話が中心になるのだが、試験の中で学生たちがさまざまな意見を述べてくれるので、そのことを取り入れながら進化していくこともできるし、新しい「教育の話」が生まれてくることもある。中でも一番興味を持って取り上げられたのが「教室に迷い込んだ雀」の話である。ガラスを知らないばかりに自由の空に飛び立てない哀れな雀。自由を手に入れるためには知識が必要なのだ。「ここにバイオリンがあります。どうぞ自由にお弾きください。」「あなたはこの自由を手にすることが出来ますか。」「あなたは自分のしたい時にしたい事をする事ができるそのことを自由だなどと思っているのではありませんか。」「自分が出来る範囲のことを繰り返すのは何度も何度も窓ガラスにぶつかる雀と同じではありませんか。」「バイオリンは練習なしには弾くことはできません。努力してバイオリンを弾く自由を手に入れるのです。」「勉強して知識を身に付け、真理を探究すればより高度な次元の自由に到達できるのです。」「そうです、『真理はわれらを自由にする』のです。」「どこかで聞いた偉大な言葉ですね。」というように話は進化していくのである。彼の小林秀雄は「自由とは自己の能力の限界に束縛されることである。」といている。

役に立つ話も、立たない話もさまざまであるが、学生と意見を交換しながらとりとめもなく考える時間を持つことは善いことである。同じ課題を又来る年に別の学生たちと話題にしてみたら今年と同じ結論になるだろうか。楽しみなものだ。

参考文献

- バートランド・ラッセル著 (1996) 市川三郎訳 西洋哲学史 みすず書店
森信三著 (1997) 修身教授録 致知出版社